http://www.edu.pref.kagoshima.jp/　（通巻第１８４７号）

# 指導資料

鹿児島県総合教育センター

特別支援教育 第179号

－幼稚園，小学校，特別支援学校対象－

平成27年４月発行

# 知的障害のある幼児児童生徒の言葉や情緒を育む絵本の読み聞かせの進め方

特別支援学校の学習指導要領解説には，小学部の知的障害である児童に対する教育の国語の内容に，絵本の取扱いが述べられている。また，特別支援学校などでは教師が読み聞かせを始める歌を歌い始めると，笑顔になったり，自分から着席したりするなど，読み聞かせが好きな知的障害のある幼児児童生徒が多い。このように，知的障害のある幼児児童生徒にとって絵本は身近なものであり，言葉や情緒を育むために，読み聞かせの充実を図っていくことが大切である。

そこで，本稿では，知的障害のある幼児児童生徒の言葉や情緒を育む絵本の読み聞かせの進め方について述べる。

## １　絵本の読み聞かせの意義

絵本は，想像力豊かな絵と洗練された言葉で構成され，幼児から大人まで楽しむことができる。

絵本の読み聞かせは，幼児児童生徒に絵本を見せながら読んで聞かせることで，読み手と聞き手が絵本の絵と文を共有し合うものである。そして，その中で，読み手と聞き手が絵本を通して感動や体験を分かち合っていくものである。

柳田[*1)]は，絵本の読み聞かせの力として次のことを挙げている。

- 言葉（言語力）を発達させる。
- 感性・感情をきめ細かく分化発達させる。
- 文脈理解力を発達させる。
- 読み手の感情をこめた読み方によって，子どもの心に絵本の内容が「現実体験」に等しいかたちで，深く染み渡って記憶される。　など

また，松居[*2)]は「先生の声で語られる絵本を友達と一緒に聞くことは“共に居る”歓びがあり，互いに共感し合う経験を通して感性は豊かに育つ。」と述べている。

このように，絵本の読み聞かせは言葉の発達や情緒を育むことに大きく関わっている。抽象的な概念の理解が苦手な知的障害のある幼児児童生徒にとっても，絵と言葉で構成されている絵本は，内容が分かりやすく，言葉をまねたり，読み手と感動や体験を共有して関わりを深めたりすることで言葉や情緒を育むなど，教育的効果も大きい。

## 2　絵本の読み聞かせをする際の留意点

読み手の読み聞かせ方によって，絵本の価値は大きく変わる。松居[*3)]は「豊かな読み取り方をした人が，子どもに心をこめて読んであげた場合，絵本の言葉はほんとうに生き生きとした，暖かい，豊かなイメージをもった言葉として子どもの心に入ります。」と述べている。つまり，読み聞かせは，読み手が絵本をただ読んで聞かせるのではなく，読み手の感動などを伝えることである。また，読み聞かせは，見る絵と聞く言葉によって感動を感じ取ったり，疑似体験をしたりするものである。

抽象的な概念の理解が苦手な知的障害のある幼児児童生徒に，読み聞かせで感動を感じ取らせたり，疑似体験をさせたりするには，以下のことに留意しながら，同じ本を一定期間，繰り返して読み聞かせをするなど，継続的に行うことが必要である。

留 意 点

**○　読み聞かせをする前に必ず下読みをする。**

・　内容を十分に把握する。
・　読み間違うことなく，スムーズに読むことができるように，声に出して読む。
・　ページをタイミングよくめくることができるように，開きぐせを付けておく。

**○　絵本の持ち方に気を付ける。**

・　絵本が見えやすいように，体の前や横に絵本を持つ。その際，読み手の左右や絵本に一番近くにいる幼児児童生徒にも絵が見えるような位置に配慮する。
・　ページをめくりやすく，絵本がぐらつかないように，片手で折り目をしっかりと持つ。

**○　導入を大切にする。**

・　幼児児童生徒の発達の段階や実態に応じて，読み聞かせを始める歌を歌う，手遊び歌をする，絵本に関する話をするなどして，期待感を高め，スムーズに読み聞かせに入ることができるようにする。

**○　読み方を工夫する。**

・　最初に表紙をじっくり見せてイメージを膨らますなど，表紙と表題を大切にする。
・　絵をよく見せながら，聞き手が聞き取りやすいように，明瞭な発音で読む。
・　内容を思い描きながら，気持ちを込めて明るい調子でテンポよく読んだり，静かな調子でゆっくりとしたテンポで読んだりする。その際，聞き手に絵本の内容よりも読み手の声の調子などが印象に残らないように，声に変化を付けすぎないようにする。
・　段落間や「…」と記されているとき，時間が経過しているような場面などでは，間を大切にして読む。
・　集団での読み聞かせでは，一番遠くにいる幼児児童生徒に声を届かせるように張りのある声で読む。その際，大きな声が必ずしもよく通る声ではないことに注意する。
・　絵本の言葉を大切にし，省略したり，言い換えたりせずに，そのとおりに読む。
・　聞き手の幼児児童生徒の反応を見ながら行う。

**○　繰り返し読み聞かせをする。**

・　幼児児童生徒の発達の段階や実態に応じて，同じ絵本（好きな絵本など）を繰り返し読んで絵本の楽しさを味わわせたり，内容のイメージを膨らませたりする。

**○　読み聞かせ後に，あらすじや感想などを無理に言わせない。**

・　絵本の楽しさを味わわせることを大切にする。

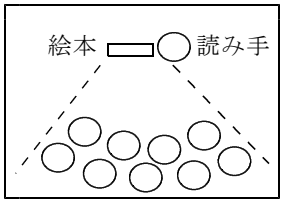


**図１　座らせ方**

**○　座らせ方に配慮する。**

・　聞き手の人数に応じて，人数が多いときには扇形のような隊形（**図１**）にするなど絵本が見やすいような座らせ方を工夫する。
・　集団に入れないときには集団から離れた座席にしたり，斜視などの見えにくさがあるときには前方の座席にしたりするなど，実態に応じた席の位置に配慮する。

## ３　絵本を選ぶ際の留意点

絵と言葉で構成されている絵本は，絵を見るだけでもその内容が伝わってくるため「絵を読む」とも言われており，絵本における絵は重要な意味をもっている。

知的障害のある幼児児童生徒に絵本を楽しませるには，読み手の思いだけで絵本を選ぶのではなく，以下のようなことに留意するとともに，生活年齢を考慮しながら，発達の段階などに応じてどのような絵本を読み聞かせするのかを検討することが大切である。

留意点

**○　分かりやすい内容であること。**
- 「いつ，どこで，誰が，何を，どうする」などの内容が，分かりやすいもの。
- 聞いたときに情景などを想像させやすいもの。

**○　絵が話を豊かに表現していること。**
- 色彩の鮮やかさなどではなく，絵が想像力に訴え掛けるようなもの。
- 絵と文が調和していて，絵がテーマや内容を表現しているもの。

**○　リズムやテンポのよい言葉が使われていること。**
- 繰り返しのリズムの響きなどが，心地よいもの。

**○　読み手が感動したものや好きなものであること。**
- 読み手が感動したり，繰り返し読みたくなったりするもの。

**○　発達の段階に応じていること。**
- 幼児児童生徒の興味・関心，言語理解や内容理解の程度等に応じたもの。
- 幼児児童生徒が集中できる時間に応じたもの。

**○　障害の状態に応じていること。**
- 視力が低かったり，物の見えにくさがあったりするときには，絵が見えやすいような大型絵本や，触って絵を読み取ることができる絵本を選ぶなど，障害の状態に応じた大きさや形状などのもの。

## ４　実施上の留意点

学校などで読み聞かせをするときには，個別に行う場合と集団で行う場合があり，どちらの読み聞かせも意義がある。

個別に行う場合に，休み時間などに幼児児童生徒が好きな絵本を読んでほしいと要求するときには，同じ絵本でも繰り返し読み聞かせることが望ましい。また，知的障害と肢体不自由との重複障害で姿勢が安定しづらい幼児児童生徒への読み聞かせでは，見えやすい絵本の位置や距離を配慮するなど，障害の状態に応じた対応が必要である。

集団で行う場合に，国語の教材で絵本を取り扱う際は，読み聞かせを行った後に，学習の目標に応じて，実物を触らせたり，動作化したりして出てくる言葉の意味や内容の理解を深める工夫が大切である。朝の会や帰りの会で読み聞かせを行う場合は，計画的に継続して行うことが大切であり，幼児児童生徒の発達の段階や季節，行事等を考慮したブックリスト（**図２**）を作成することも有効である。

絵本一覧表（小学部）

| 月 | 低学年 | 中学年 |
|---|---|---|
| 4 | ・はらぺこあおむし<br>・おべんとうなあに？<br>・ぽぽぽ | ・うさぎのおうち<br>・えんそくバス<br>・みんなともだち |
| 5 | ・わにさんどきっはいしゃさんどきっ<br>・ぞうくんのさんぽ | ・へんしんトンネル<br>・わたしのワンピース<br>・なにをたべて |

**図２　ブックリスト例**

また，学級やプレイルームなどに絵本を常備して，幼児児童生徒が自由に絵本に触れられる環境を整えることも大切である。

## ５　実践例

ここでは，知的障害があり，当初，絵本に興味を示さず発語の少なかった児童に対する事例について述べる。

1　児童の実態（特別支援学校小学部第５学年）

| | |
|---|---|
| 言語 | ・　欲しいものやしたいことがあると単語や指さしで要求を伝える。<br>・　単語（一語文）が中心で，発音が不明瞭なために相手にうまく伝わらず，言葉で伝えることを途中であきらめてしまうことがある。 |
| 情緒 | ・　日頃は落ち着いているが，苦手なことや嫌なことがあると頭をたたくなどの自傷行為があったり，床に寝転んで大きな声で泣いたりする。<br>・　注意をひきたかったり，興味がなかったりするときに，授業中に机を揺らして大きな音を出すことなどがある。 |

2　実施時間

朝の会（日常生活の指導）の時間に，１年間を通して実施

3　形態

集団での読み聞かせ（６人在籍）

4　絵本の選択に当たって考慮したこと

・　発達の段階（興味・関心，言語理解　等）

例）「三びきのやぎのがらがらどん（福音館書店）」，
「ゴリラのパンやさん（金の星社）」　など

・　季節や学校行事

例）「さつまのおいも（童心社）」，「からだにもしもし（あかね書房）」　など

5　読み聞かせに当たって配慮したこと

・　日によって違う絵本を読むのではなく，同じ絵本を一定期間続けて読んだり，定期的に繰り返し読んだりする。

・　読み聞かせをする絵本は学級文庫に置き，いつでも読むことができるようにする。

6　経過

| | |
|---|---|
| 一学期 | ・　学期当初は，着席はしているが，絵本を見ないで机に顔を伏せたり，机を揺らして音を出したりすることがあった。<br>・　学期途中から，興味のある内容の絵本を見て読み聞かせを聞くようになった。 |
| 二学期 | ・　好きな場面で教師の言葉をまねて「だれだ」などのせりふを言うようになった。<br>・　読み聞かせを集中して聞くようになり，場面によっては，声を出して笑ったり，泣きまねをしたりするようになった。<br>・　休み時間に好きな絵本を教師に持ってきて，出てくるもの（パンなど）や登場人物の名前を言いながら読み聞かせを要求するようになった。 |
| 三学期 | ・　好きな場面になると，絵を指しながら出てくるものや登場人物の名前を友達に単語で教えるようになった。<br>・　友達に好きな絵本を見せながらせりふを言うなど，自分なりの読み聞かせをするようになった。 |

7　成果

興味のある絵本はまだ限られているが，年間を通して継続的に読み聞かせを行ったことによって，登場人物になりきって絵本の世界を楽しんだり，積極的に言葉で友達に関わったりするようになった。

抽象的な概念の理解が苦手な知的障害のある幼児児童生徒にとって，絵本は内容が分かりやすい。言葉の発達や情緒を育んでいくためにも，読み手が絵本の世界の楽しさを繰り返し味わわせることが大切である。各学校などで継続した絵本の読み聞かせを計画的に行うことが望まれる。

－引用・参考文献－


1)　柳田邦男著『みんな，絵本から』平成21年，講談社
2)　松居直著『絵本のよろこび』平成15年，ＮＨＫ出版社
3)　松居直著『わたしの絵本論』昭和54年，国土社
○　波木井やよい著『読みきかせのすすめ』平成元年，国土社
○　笹倉剛著『感性を磨く「読み聞かせ」』平成11年，北大路書房
○　高山智津子・徳永満理著『絵本でひろがる子どものえがお』平成16年，チャイルド社


（特別支援教育研修課）